

編集後記 ○今夏は梅雨明けが例年になく遅く、明けた途端に連日猛暑です。にもめげず幹事役の私としましては、精神のクールさと情熱のホットさを奇妙に調和させながら、この編集後記にペンを走らせているわけです（実はフーフー言いながら）。

○4月26日未明にチェルノブイリ原子力発電所で起きた放射能噴出事故は、世界中の人々に大きな衝撃を与えました。スウェーデンに住む友人のDさんから届いたお便りの一部をご紹介しますと思います。

「……こちらは美しい美しい初夏なのですが、どうもソ連の原発事故がもたらした影が濃く、心から楽しめずにおります。部分的にはかなり強い汚染もあり、長期にわたってこの問題をかかえねばならないようです。お大事に、という挨拶がだんだん空虚になって行くような気がしてなりません。では、

ストックホルム発 5月29日」

○日本列島の梅雨前線の北上が変則をきたしたのも、ひょっとして原発事故による大気圏気流の異変が原因かもしれないとすれば、梅雨明け宣言をミスってしまった気象庁を責める気には、まだとてもなれないわけです。

○「我が輩は人間である。名前（肩書、国籍）はもう無い。自由に垣根（専門領域、国境）を越えて旅する……」というのはひとりごとですが。とにかく「組織の論理」や「大衆の論理」なるものに流されない、素朴な自由人としての研究・社会活動が、若い世代に期待されているように思います。本号の特集“国際平和と社会保障”を是非ご一読ください！

(F. M.)

編集委員長 小山路男 (社会保障研究所長)

編集委員 地主重美 (千葉大学教授)
都村敦子 (社会保障研究所研究部長)
西三郎 (東京都立大学教授)
野口悠紀雄 (一橋大学教授)
福武直 (東京大学名誉教授)
保坂哲哉 (上智大学教授)

星野信也 (東京都立大学教授)
堀勝洋 (社会保障研究所調査部長)
三浦文夫 (日本社会事業大学教授)
宮澤健一 (一橋大学教授)
安川正彬 (慶応義塾大学教授)

編集幹事 曾原利満 (社会保障研究所主任研究員) 三上芙美子 (社会保障研究所研究員)
栃本一三郎 (社会保障研究所研究員)

(五十音順)

季刊

社会保障研究 Vol. 22, No. 2, Autumn 1986

(通巻93号)

昭和61年9月25日 発行

編集・発行所

社 会 保 障 研 究 所

〒107 東京都港区赤坂2丁目19番8号
赤坂2丁目アネックスビル内
電話 (589) 1381

製 作

財団法人 東京大学出版会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番地の1
電話 (811) 8814